
透明な彼女と、非日常。

路地裏の黒猫

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

透明な彼女と、非日常。

【Nコード】

N6238S

【作者名】

路地裏の黒猫

【あらすじ】

轢かれそうになっていた女子学生、その学生を抱き寄せる男性が一人、間に合わず大型車は彼らの体を通り抜ける。

気が付けば学生は半透明に、そして真っ白な石畳、日本晴れの場所にいた。

遠くには、先端が空に溶けた塔が見える。

とりあえず、歩き出した。

日常から非日常へ（前書き）

とりあえず、ひねくれた設定のあまり無いテンプレ物を書きたいと思いいち書きました。

一話一話短く更新するのでできるだけ、ほぼ毎日更新できたらいいなと思います。

皆様の御暇つぶし、至福の時間となれるように願います。

日常から非日常へ

目の前の横断歩道の中央に女子学生が一人立ち尽くしている。

横断歩道の信号は青。

彼女は遅刻しそうなのか、色が変わった瞬間走り出した。

だが、それが仇になった。

信号が変わるか変わらないかのほんのごく僅かな時間。

駆け込むように走り出した彼女の横には、同じように信号が赤に変わるかわらないかのぎりぎりの所で突っ切ろうとしている大型車が近づいていた。

突っ切ろうとしているせいか、スピードがかなり出ていた。

クラクションも鳴らさないで、ブレーキ音もしない。

小柄な彼女に気づいていないのだろう。

最悪の瞬間が目の前で訪れようとしていた。

足が勝手に動いた、隣に並んでいた友人の手が俺の肩をつかもうとするが空を切る。

おいっ！友人の声を置き去りにして駆ける。

彼女がちょうど大型車の前で自分が轢かれそうになっていることに気がついてしまった。

気がつかないで、走りきればもしかすると助かったかもしれないのに。

だが彼女は、見てしまった。

自分の目の前に迫る《死》を。

手を伸ばす、大型車はほんの数メートル手前でブレーキをかけ始めた。

耳障りな音がすぐ近くで聞こえる。

悲鳴が聞こえる。

手を伸ばす。

目の前には、呆けた表情の少女。
ぽかんと大型車を見ている。

とどけ。

とどけ。

手を伸ばす、彼女のかばんに指がかかった。

「え？」

思い切り、引き寄せる。

せめて、盾になろうと大型車と彼女の間に体を入れようとするが。

入れ替える間もなく、二人並んだ状態で大型車が走り抜けた。

耳障りなブレーキ音、悲鳴が横断歩道に響く。

大型車は、歩道を通り抜け歩道の上の信号を越えて、さらに奥の信号を過ぎ停止線を越えて停止した。

「あ・・・ああ・・・ああああ。」

運転手は若い女性だった。

タコメータの脇に息子の写真。

「どうしよう、どうしよう、どうしよう。」

人を轢いてしまった。

大型車だったせいか、ほとんど衝撃は無く（・・・）跳ね飛ばしたわけではなく、車体の下に引きずり込んだのだろうと頭の隅で、予想する。

引きずり込み、タイヤで引きちぎり、頭がつぶれ、ぐしゃぐしゃになった二人の人間を想像した。

「うあああああああつ！」

ハンドルに突っ伏し頭の中は完全にパニックになっていた。

エンジンはエンストを起こし止っていたが、震える足はブレーキを思い切り踏みしめ、額はクラクションにあたりプアーアーアーアーと鳴り続けていた。

しかし、歩道の周りの人々は誰一人声を上げなかった、いやあげられなかった。

人が轢かれれば救急車を呼ぶ声や、遺体を撮影しようとする野次馬や、悲鳴を上げるこえなどで、騒然とするはず。

しかし、歩道の周りは静寂に包まれていた。

なぜなら、轢かれる直前、二人は忽然と消えたのだ。

衝突音もなく、なんの予兆も無くただただ忽然と消えた。

「なんの冗談だよ。」

呟いた彼の友人はそう呟くしかなかった。

ただ、聞こえるのはクラクションの耳障りな音と、大型車の運転手であろう人の叫び声だけだった。

~~~~~

「ここは？」

まっしろな石畳の上、空は雲ひとつ無く風も無い。

「おれは轢かれたんじゃないのか？」

気を失い何故か、半透明となっている少女を腕に抱いていた。  
黒い髪、黒いまつげ、ルージュだろうかふっくらとした唇は季節感  
ある淡い色していた。



「はなすわけにゃ・・・いかねえよな。」

抱いたまま気が付くと面倒なことになりそうな気がして、手を離そうと思うが気を失っている上、地面は石畳、妙齡な少女を横にして置くのは気がひけた。

とりあえず、抱きとめていた形から。

「わるいな、・・・かるっ。」

お姫様抱っこに変える。

手に、腕に彼女の感触が直に感じられる。

しかし、そこに在るのに見えるのに、重さがほとんど無い。抱いている感触はするのにな、だ。

「なんじゃこりゃ。」

自分の腕の中、目を閉じてかすかに息をしているように見える少女を見つめる。

やはり、半透明。

服は透けて見えないが。

視線を上げると、ずっと無効に一本だけ、空高く・・・先端が空の青に消えるほど高い柱のようなものが見えた。

やけに、自分冷静だなあと思いながらもとりあえずその塔を、目指すことにした。

「しっかし軽いなあ。」

腕に抱くのは眠り姫、抱える自分はただの人。

見渡す限りの白亜の石畳、風も無く空は高く雲も無い。

キーンと耳鳴りがしているようになるほどに静寂。

塔の場所までは遠い。

はあ、と溜息一つ。

「行くしかないか。」

## 至福の時間（前書き）

始まりました透明な彼女と、非日常。

未来ある明日へが自分なりに凝ったものになって息抜きに書きたいなと思っています。

一話一話が短くなる予定ですし、なにぶん初心者なので至らぬところがあると思いますが楽しんでください。

## 至福の時間

「やっと・・・やっとついた・・・はあ。」

最初は格好つけてお姫様抱っこかしてたが、予想以上の長距離を歩くことになって重さをほとんど感じないといっても、両手が塞がった状態で歩くのはかなり大変だった。  
途中からおんぶに変更した。

においが・・・髪の毛が・・・む、胸が・・・

諸問題はあったが、何とかたどり着いた。

「何だよこれ。」

塔らしきものの入り口が見えた。

塔は石畳と同じ白亜に輝くしかし、石畳と違うのはその壁に、一つの汚れどころか、つなぎ目さえ一つも無い。  
触れると、ざらざらしていた。

とりあえず、入り口が見えたので入る。

中は、天井が無く。

光が入る窓のようなものも無いにもかかわらず明るかった。

「どうすりゃいいんだよ。」

頭を振りかぶりとりあえず中央へ歩き出す。

「よっと。」

耳元で規則正しい吐息を感じる。

背中に感じるささやかな感触、鼓動もちゃんと感じる。

目は覚めていないが。

10分ぐらい歩くと中央に、俗に魔方陣と呼ばれるようなものが見えた。

「ねぎ○か?・・・な○は・か?。」

一人呟く。

人間一人になると独り言が増える様だ。

「行くしかないかな。」

ゆっくり、だが確かに近づく。

背中の鼓動が聞こえる。

自分が何故こんな場所にいる、轢かれたはずなのに生きているのか。此処はどこなのか。自分は死んでいるのか。

彼女は何故、半透明なのか。感触だけあるのか。

疑問が浮いては消えていく。

恐らく自分ひとりだったら、発狂していたかもしれない。

死んだと思ったら一人で取り残される。

周りは見覚えの無い場所。

音も無く。

ただ、ただ青空。

でも、発狂せざいられたのは。

「一人じゃないからなあ。」

そう、自分は一人じゃなかった。

背負う彼女の体温が、自分を冷静にさせる。

「乗りかかった船だ、できれば助けてやりたいと思うのが人間だろうが。」

そう呟いて、小さな恐怖心を乗り越えて魔方陣らしき物の中央にたつ。

「転移かなあ？何かが発動するのか。邪がでるか蛇が出るか。藪蛇じゃなかったらいいなあ。」

魔方陣が輝きだす。

魔方陣の円が黄緑の光を放ち塔の上へ伸びていく。

輝きは足元から強くなっていく。

「助けてやるからな。」

呟きとともにまぶしすぎて目を閉じる。

一瞬の浮遊感。

『よくきたな。自分を失わず、まあ氣を楽にせえ』

声が聞こえた。

目を開ける。

そこは・・・

まるで学校の校長室だった。

右側の壁には書類がつまった本棚。

左側の壁にはトロフィーのようなものや、剣や兜が置いてあり、目の前には応接セット。

ふかふかしていそうな、高級感あふれるソファ。

奥の窓際には校長室にある机、高級感あふれるものがあり、机の上には地球儀のようなものが数種類おいてあった。

地球の大陸のようなものも見られたが、まったく見たことの無い大陸の配置の地球儀もあった。

そしてペン立と、少しの書類。

ソファには本当に校長先生のような初老の人物がスーツ姿で座って、コーヒーを入れていた。

「あんた誰だ？」

コーヒーカップからいい香りが部屋に立ち込める。

『まあ、そうあせるでない。後ろの少女をソファに横たえろとい  
い。』

「・・・わかった。」

とりあえず爺さんが座っていないほうのソファーに横たえる。  
胸が上下し少し開きかけの唇から、小さな呼吸音がきこえる。

『若造もすわれい。』

「いや、俺はいい。彼女が寝ているからな。」

『そうかい、まあいいじやろう。』

そういつて、自分で入れたコーヒーを一口飲む。

『そうじゃ、お前さんは何か入れるかい？』

視線で、角砂糖と小さな専用のカップに入ったミルクを示す。

「・・・両方頼む。」

『何個じゃ？』

「二つ。」

角砂糖をスプーンでぽちぽちと入れる。

クリームをいれスプーンでかき混ぜる。

綺麗な、渦が出来た。

爺さんは一つうなずき。

カップを持って俺に手渡した。



『聞きたいことがたくさんあるだろうが、とりあえず飲みなさい。落ち着くからの。』

一口飲む、香りが鼻を通り抜ける。  
すごく旨い。

「・・・うまい。」

爺さんは満足そうに一つうなづく。

『さて、おちついたかね?』

「・・・ああ、たすかりましたよ。」

もう一口。

程よい甘さと、苦味が口に広がる。

「・・・うまいです。」

『そうかい、それはよかった。』

嬉しいのだろう、その顔を相好に崩し微笑む。

『年寄りの暇つぶしじゃ、コーヒーを入れるのが妙に上手くなったのう。だが一人だと味気なくてのお。お前さんのような者でも一緒に飲むと一味違うものじゃな。』

目を閉じてうなづく。

どのくらいの時間を一人で過ごしていたのか。

「質問いいですか？」

『うむ。』

壁にかかっている時計が、それぞれ違うスピードで回っている。  
数字も見ただことも無いものがある。

それぞれの音が部屋に静かに染みる。

「貴方はだれですか？」

『神のようなものじゃよ、若人よ。』

静かに時間が過ぎていく。

## いろいろ説明よろしく！

『そこに眠っている少女は笹倉和美、彼女は不幸の星の元生まれてしまった。そのために幼少の頃から不幸を一身に受けてきた。』

コーヒーを味わっていた俺に急に語りだした。  
自称神。

『両親の死、よくある親戚同士の子供の責任擦り付け合い、家もいつの間にか売られ彼女は安い学生寮で生活するしかなかった。』

かちかちかち、時計の音が室内響く。  
互いにコーヒークップを置いて、静かに話をする態勢になる。

『しかしな、そのこは強かじゃった。両親の遺体の前で一度泣いただけ、それくらい親戚に目の前で邪魔扱いされても、思い出のつまった家を売り払われても泣かなかった。』

俺は、爺さんから視線をそらすとソファで眠っている彼女を見つめる。

『笹倉和美自身、怪我を良くした。だがなあ、一人で我慢しているのを見ていると不憫でう。本当は一人の人間に肩入れするのはルール違反なのじゃが、大きな事故や、傷跡が残りそうな怪我をしそうになったら、介入し助けていた。』

「だったら、なぜ今こんなことになっているのです？ 爺さんが助けられればこんなことにならなかったんじゃないのですか？」

にらみつける、静かにでも意思を込め。  
時間は過ぎていく。

「何故、こんな中途半端をしたんですか？なぜ、彼女は半透明になんかになっているんですか？」

『・・・良い面構えだな、少年。』

「俺は少年なんかじゃない、24歳、榊亮輔だ。」

『・・・すまんのう。それはさておき。亮輔よ、不幸の星に生まれてしまったものは、総じて短命なのだよ。事故や。不治の病にかかってしまうのでな。これは、私でもどうしようもない。あのとき、あの瞬間和美は、死ぬ運命じゃった、しかし。』

いったん言葉を切り、コーヒード口を潤す。  
ふう、と小さな溜息が聞こえた。

『助けたいと思ってしまったのじゃよ。不幸ばかりの人生の彼女をのう。そこにお主が運命を捻じ曲げてまで和美を助けおった、おぬしは隣にいた友人につかまれ助けることが出来ない運命じゃったはずだったが、それを振り切った。そして、和美を胸に抱き助けようとした。』

自称神がじっとこちらを見つめる。

何かを探すように、探るように。

見極めようとしていた。

『魂は助けることが出来た、しかし肉体がどうしても無理じゃった。』

「まさか、俺らは轢かれて肉体がないとか言わないいませんよね？」

無意識に自分の肩をだく。

『おぬしの肉体はある。しかし、今和美の肉体は異世界にある。』

「・・・・・・・・・・はあ????」

何だその超展開。

『本当なら、肉体と魂、記憶を持ったまま異世界へ行き今まで不幸かしらなかった彼女に普通の生活を出来るぐらいの支援をし、その生活の中で普通の人並みの幸福を感じて欲しいと思ったのじゃが。それと、巻き込まれたおぬしも共に異世界へおくるはずだった。』

「まてまてまて、何故ここで異世界がでてくる、元の場所に戻してくれればいいじゃないか。」

『そうはいかん、もとの場所に戻せば、結局不幸の星の元これから死ぬまで不幸な運命にさらされて結局しんでしまうじゃろう。だったら、異世界へ転生させ新たな生活を与えたいと思ったのじゃ、偽善にしかなんがのう。』

「じゃ、なんでそうしないのですか？」

『轢かれる瞬間、気を失ってしまったの、魂と体のリンクがあやふやになっていたんじゃ、その状態で無理にこちらに引っ張ってしまつてのう、それが原因で魂はこちらにより、再構成できたのだが・・  
・そのなんだ、肉体が、肉体だけが異世界に落としてしまつてのう。

」  
心底困ったという顔で自分がミスりましたと告白する自称神。

「・・・じゃ、何ですか？そのこの体は帰らず魂だけでどうしようもないっていうのですか？それじゃ、あまりにも無責任なんじゃ。・  
・」

『いや、肉体はある、確かに生きて存在している。ただ、場所が場所での・・・・。』

「そこは？」

『異世界の中で未攻略の迷宮。その最奥。そのさらに先、封印された場所にある。さすがに異世界となると私の力も僅かしかとどかず、生命活動を維持するのがやっとじゃ。こちらに連れてきたり魂を元に戻すこともできん。』

テーブルにひじを着き、手を額に置きうつむく。  
その表情はまるで、自身の孫娘を心配する好々爺に見えた。

『たのみがある。』

ああ、嫌な予感がする。  
このながれだと。

「俺に異世界へ行ってくれというのですか？」

『・・・そうじゃ、そして肉体を救い出して欲しい。』

「一つ良いですか？俺は元の世界にもどれますか？一度異世界に降りたら戻れないってことはないですよ。」

『それは大丈夫じゃ、我が命を賭けてももどしてやる。』

「判りました、そこはどのような世界なのですか？」

『魔法があり、魔法のせいで科学がまったく進歩していないせかい。魔物が跋扈し、魔界があり、迷宮がある。種族間の戦争もあったが100年前に終結し、今でも小さな諍いがあるが平和じゃ。だがそのおかげで、戦争が無くなった。が、おおくの兵士は失業してしまった。そこで各国の首脳は世界に散らばる迷宮、塔の攻略したもの、あらたな発見や技術の発見。道具の発見。それによる経済効果を狙い発見したものに報酬と家を与えることにした。おおくの者が失業したが生活のため迷宮や塔の制覇にのりかかった。おおくの犠牲を払ってな。そして、さらに数百年。失業した兵が冒険者となり、ギルドを作り、魔法の道具を見つけたり改造したり、過去文明の証拠を見つけたりすることを生業とし生きる者達がでてきた。そんな世界じゃ。』

思いつきりファンタジーじゃないか。

しかも異世界召喚。

「質問、その世界で生活した場合、元の世界に戻ったときの弊害はあるんですか？」

元の世界に戻ったら数千年すぎていましたなんていや過ぎる。

『我が命に賭けて誓おう、元の世界もとの時間にもどしてやる。』

なら、いいか。

『その体のまま行けばすぐに死んでしまうかも知れぬから、私ができるかぎりの事をしよう。』

「判りました、よろしくおねがいします。」

恐らく、肉体強化とか魔力増大とかだろうなあ。

『その子の魂を導き、肉体を取り戻した暁には元の世界での生活も保障してやろう。それが報酬だ。』

「判りました。」

そのとき、ソファアで横になっていた和美がゆっくりと目を醒ました。

「んああゝゝあ？」

・・・甘ったるい声で伸びる。

これには、俺と爺さんは固まってしまった。

「・・・・・・・・あれ、私いきてるんだ・・・・。」

半透明の体をふわふわ宙に浮かせてんんん？と首を傾げていた。セーラー姿で浮いている。



俺はぬるくなってきたコーヒーを飲み干し。  
ゆっくりと、コーヒークップを置く。  
彼女に現状を認識させるために。

「自分の体、見てみて。」

俺は指をさして示す。

「んゝゝゝんっ？」

・・・かちかち時計がゆっくり10秒過ぎたあたりで。

「私透けてる???？」

やっと気が付いた。

「・・・しんじやった？」

どうなの? って顔で俺を見る。

「いや、生きてる。」

「でも、からだ透けてるよ？」

「足あるだろ？」

そういう問題かっと思分に突っ込みをいれるが。

「んゝゝ、あった!！」

ばあつとか後光が見えたのはきのせいだろうか。  
納得してしまった。

「じゃ、何ですけてるの？」

一応ぎもんに思うくらいの頭はあるようだな。

・・・自分だいぶ失礼だな。

説明も、正直面倒だ。

このさい、なすりつけるか。

「それは・・・神っあんたが説明してください。」

『丸投げするとは・・・まあよい・・・』

死んでいないこと。

事故の瞬間のこと。

「じゃ、貴方がたすけてくれたんですね？」

「ああ、俺は榊亮輔。」

「私は笹倉和美。15歳来年高校生です。」

・・・中学生だった。

説明は淡々とつづく。

魂だけになってしまったこと。

肉体は、異世界の迷宮の奥深くあること。

それらを説明すると悲鳴が響いた。

絶望とかじゃなく黄色いひめいだっただが。

『ということなんじゃ、本当にすまなk「異世界転生キターーーーー」  
「ーーーーっ!!」』

すっごく嬉しそうだった。

いろいろ説明よろしく！（後書き）

4月24日 誤字修正

## 半透明少女

「本当に異世界にいけるんですかっ!!!!!!!!!!」

『う、うむ。』

自分の姿に驚きもせず、何故こんな場所に連れてこられたかとかを  
気にも留めず、ものすごく喜んでますこの娘。

「うわ~~~~じゃあじゃあ、エルフとかフェアリーちゃんとか、居  
ちゃったりしちゃったりするんですかっ!!!!!!!!!!??」

なんだこの娘。

不幸の星の下に生まれたんじゃないのか？

ふつう、根暗や無口少女になったりしないのか？

・・・俺的は無口少女のほうがよかったのだが。

『和美よ、お前はあいからずじゃなあ。』

「ん~~~~そのこえどっかで聞いたことあるような??」

ほっぺに右手の人差し指を押し当てて、むむくと首をかしげて考  
える。

『あれだけ、啓示をしたというのにまだ覚えておらぬのか・・・。』

微妙にショックを受けている爺さん。

いや、自称神様。

どれだけ、一人の人間に干渉しちゃってるんですか???

「・・・もしかして、夢に出てきてくれたおじいさん???

ほっぺから、眉間へと移した指でしわをほぐしながら、答えた。

『まあ、そうじゃ。すまんのお力、及ばずこんなことになってしまった。』

「いえいえいえいえ。大歓迎ですっ！異世界ってあこがれていたんですっ。しがらみやら、あのうるさい叔母さんや、下心丸出しの汚いおじさん共から離れられるなら本望ですっ!!」

むんつと、唇を突き出し、胸の前あたりで両手で拳を握る。

『ふおっふおっふお。相変わらずげんきじゃのう。』

「おじいちゃんのおかげだよ、助けてくれたりアドバイスくれたり、相談のってくれたり。本当にたすかりました。」

ソファから立ち上がり、深々とその長い髪を垂らして頭を下げる。

神様は、相好に表情を崩し嬉しそうにしていた。

やっぱり、孫娘を前にした好々爺にしか見えない。

『そういつてもらえると、うれしいのお。そうじゃ、異世界で何がしたい？私に出来ることなら何かしら与えるが??』

おいおいおい、どんだけ肩入れするんだよ。

まあ、多分俺と一緒に行動するのだろうから、力があれば助かるん

ですけどね。

「んんんテンプレだと、魔力かなんかでも、美少女エルフに転生とかも棄てがたいし。錬金術・・・チャクラ・・・でも、小柄な私の体で巨大な武器をふりまわすとかもいいかも・・・。」

ぶつぶつ、自分の世界にはいつてしまう。

「爺さん、彼女は俺の存在に気づいているんでしょうか？」

『きづいてないのじゃろうなあ。』

苦笑いという表現がこんなにぴったりな表情をはじめてみましたよ。たっぷり悩むこと5分ぐらい。はっ、とした顔で。

「おじいちゃん、今大変なことにきづいた。」

まじめな顔で言う。

『なんじゃ、前の世界で遣り残したことか？』

「なんで、私半透明???」

部屋の空気が一瞬凍る。

爺さんは、コーヒーを入れようと立ち上がる途中で、一瞬かくつとこける。

「いまさらかよっ！」

静観を決め込んでいた俺に突っ込ませるとは。

「きゃっ・・・・・・・・貴方ですか？いつからそこに？？」

本当に気づいていやりませんでしたよ、この娘。



## 自己紹介

「貴方誰なんですか??」

ソファに座っているが、微妙に距離を置かれている。

亮輔は微妙みショックを受けていた。

一応、助けようとして巻きこまれたのだが・・・多分和美は覚えていないのだろう。

「爺さん、説明頼みます。」

こういった場合、距離を置いている本人から何を言っても、信じてもらえない可能性があつて、ややこしいことになりそうなので、お互い面識のある爺さんに投げる。

『ふむ、私が説明したほうがいいのじゃろな。』

俺の視線を感じ取ってくれた。

『その青年は、さかきりょうすけ桧亮輔かれそうになった和美を助けようと巻き込まれてしまった者じゃよ。』

俺に説明したように、いや、俺に説明したときよりも丁寧に説明し始めた。

小さい頃から、見ていたこと。

助けられなくて、悲しませてしまったこと。

自分が全知全能ではないこと。

事故の瞬間のこと。

そのとき、和美は死ぬ運命にあったが、それを亮輔がぶっ壊したところ。

この場所に連れてくる際、魂だけこちらにきて、体は異世界のある場所にあること。

途中まで話たとき、急に話を変えた。

『ああ、亮輔君一つ良いかね？』

「なんででしょう。」

急に話を自分に向けた爺さんに訝しげに首を傾げる。

『どうやって、運命を捻じ曲げたんじゃ？普通の人間では出来ぬことなのに。』

「知りませんよ、そんなこと。」

神様が知らないことを俺が知るわけが無いだろう。

『そうじゃなあ、もしかすると・・・。』

ふむ、と顎に手をあて思案しているようだった。

『まあ、悪いことにはならないじゃろうて。』

「いいんですかそれで。」

微妙に、不安になってきた亮輔だった。

「それじゃ、榊さんは私を助けようとして？」

「そんな、大層なことはしていないつもりなだけだね？」

『いやいやいや、大層なことをしたのだよ、胸を張りなさい亮輔君。君があの時庇おうとしなければ、彼女の肉体はなくなっていた。そうすれば、異世界で前の世界の記憶を持つことができずさらに、私の力を与えることができない状態で、ただの赤子として異世界に生をうけていただろうて。あるとき、亮輔君が助けていたから、記憶を保ちさらに、肉体を保持したまま異世界に行くことができるようになったのだよ。』

亮輔の行動が一人の人間の運命を変えてしまった。

その事実を改めて理解した亮輔だった。

でも、良い方向へ変えてしまったのだから良いしよう。

『和美、これだけは覚えておきなさい。』

柔らかなく微笑んでいた表情を引き締め、和美の顔をしっかりと見据える。

「はい。」

ふざけることなく、その視線を受け止める。

よく、俺の様にひねくれなかったものだ。

『亮輔君は本来ここに来るはずではなかった。しかし、あるとき和美を助けようとして彼も死に掛けた。そして、この場所に案内した。』

急なことで和美の魂しかこちらに連れて来れなかったこと説明したね？そして、和美の体は別の場所にあることも。』

「はい。」

俺は黙って聞く。

『その場所に、和美の体がある場所に彼に亮輔君にいつてもらうことになった。』

「えっ？」

『魂と心だけの君では、世界に戻ったとたんに消えてしまうやもしれぬ。だが、亮輔君にとりつく形になれば、大丈夫じゃろう。』

意味がわからないといったような様子だった。

しかたないだろう、いきなり死に掛けて、君は魂だけこの意味のわからない部屋にいるといわれ、さらには体が別の場所にあるということ。

気を失って、目覚めてすぐにこんなことを説明されてもすぐに理解しろというほうが酷だ。

「助けてもらって、さらにわざわざ、異世界まで来て私を守ってくれるんですか？私のために？何で？？」

正直何も考えは無かった。

でも、神様の願いを聞き入れれば、元の場所に戻してくれると約束したし、さらに乗りかかった船だからということもある。

まあ、助けた手前最後まで面倒みるのが大人でしょうが。  
それに、この和美ちゃんはかわいい。

二人で旅が出来る。

旅は嫌いじゃないし、力ももらえる。

依頼をこなせば、戻れる保障もある。

それに、こんな可愛い子とフラグを立てられるのなら……。

しかも、二人きりで旅をするようだし。

体は無いけど、役得とかもあればいいな。

それに……異世界ハーレムとか…………。

いいよねっ!?

「ま、なんとなく。」

下心満載だが、正直にはいえなかった。

いえるわけ無いよな？

「亮輔さん……。ありがとうございます。」

こちらに向き直り、頭を下げる。

さらりと流れる長髪が綺麗だ。

信頼してますって、表情でこちらを見上げる。

両手を胸の辺りで組んで、見つめてくる。

……なんだろう、この気持ち。

キュンってなる。

目を見ることが出来ずに視線をそらす。  
すると、なぜか爺さんと目があう。

『ニヤニヤ』

「そこ、にやにやしない。」

神様は、お見通しらしかった。

しかし、亮輔の考えは甘かった。  
いずれ亮輔は元の場所に戻る。  
しかし、和美は違う。

かずみは、もどることが出来ないのだ。  
いずれ来る、別れは必然なのだ。

始まり始まり。

「さて、そろそろ時間じゃな。後ろのドアを抜けて、異世界へと降りるといい。」

「了解、いくとしますか。」

『よろしく願います。』

カップに残ったコーヒーをグイッと飲み干す。  
鼻を抜ける香りがとてもいい。

ソファから立ち上がる。

「そういや、聞くのを忘れてたな。あんたの名前は？」

自称神様が、きよんとした。

「はっはっはっそうだな、名乗っておらなんだ。わしはそうじゃな、エ・ト・カリファとでも、言って置くかの。」

「判った、・・・エトカリファ。俺の能力ってなんだ？」

「身体能力の最高値をほぼ人間の限界以上に。魔力も同じく、鍛えれば鍛えただけ強くなるようにした。魔法は・・・まあ、そうじゃな、身体強化、魔力強化、加速化、装甲、魔法・物理障壁これくらいでいいじゃろ。それと、和美。」

『はい？ま・さ・か。私にもチート能力が？！？！』

「そうじゃ、お主の身体能力を上げてても意味がないからの、魔力を初めからほぼ最強クラスにしておく。それと、精霊と意思疎通できるようにしておこう。」

『精霊とかもいるんですかつ！！』

両手を胸の前で組んで、目がきらきらと輝いて・・・  
いや、ギンギンに輝いている。

「魔族、精霊、魔獣。そして、幻獣もいる。旅は常に危険と隣りあわせじゃ。あせるな、急がば回れじゃ。死んでしまっただけは元も子もないからのう。」

「死ぬこともあるのか。」

「それはそうじゃよ、人はいずれか死ぬ。それは神とて同じ。生きる者たち全て共通の理じゃ。」

『大丈夫、何があっても最強の私が貴方を守ります！！！』

「お手柔らかにたのむよ。」

ビシッつと敬礼。

『了解しました！』

「ほっほっほっ。では、いくが良い。無事を祈っている。」





かちやかちやと、音を立てる。

水で流して洗う。

「やはり、コーヒーは一人で飲むより、人と語り合いながら飲むのが旨い」

二人のたびは、これから始まる。

二人きり。

視界が開ける。

『わあ。』

風が頬を撫でていく。

「すごいな。」

地平まで続く草原。

其処に道は無く。

ただ、ただ緑の絨毯が四方に広がっている。

ところどころ、大きな岩石が顔を出している。

何故そのようになるか判らないが、細長く聳え立っている。

木々がぽつぽつと立っている。

『すごいね〜。こんな景色始めてみた、てかみちないじゃん。』

傍らには、ふわふわ浮いている彼女。

髪の毛と制服が風になびいている。

半透明でも風を感じるのだろうか？

「とりあえず、どちらにいく？」

『う〜ん。・・・あっち!』

今たっている真後ろを指差す。

「何故に？」

『何となくっ！』

二ヘラと、後ろで手を組んでくるりと振り返る。  
俺も振り返る。

『・・・山？』

「山脈だろう。」

ずっと向こうに、白く冠を冠った鋭く上がった山々が見えた。  
もちろん道は無い。  
目指す指標も無ければ、導く人もいない。  
二人だけ。

『・・・異世界かぁ。』

「・・・とりあえず歩こう、前に。じっとしていても何も始まらない。」

『うん。』

異世界。

そう、ここは自分達が生まれ育った場所ではなく。  
そして、自分達が知る人も、自分達を知っている人もいない。

俺たちは、二人きり。

今、目の前に広がる見たことの無い景色。  
空の青さ、高さ。  
かいだことの無い、とても濃い緑の匂い。

それらが、この場所が自分達の居た場所ではないという事実を。  
ゆっくりと、それでもじっくり心に染みて広がっていく。

歩く。

踏みしめる大地の。

道を遮る新緑の草達の名を、俺たちは知らない。

チクリと、胸が痛む。

何故痛む。

寂しいからか？

家族を残してきたからか？

『どうしたの？ さっきから黙って、話さないと退屈で成仏しそう  
だろう。』

目の前をふわふわ。

むゅと唇を突き出して、不満ですって顔で俺の顔を覗き込む。

「阿呆、近いぞ。」

あわわゅとあわてて距離をとる。

少し顔が朱色に染まっているのは気のせいでは無いだろう。

そんな、様子に少し苦笑いする。

確かに、知らない土地で。

草木の名前も知らないし。

この土地の名前も知らない。

それでも。

一人じゃない。

えんかうんと・・・？

膝丈ほどの草に足をとられながら道なき道を歩く。

和美は視界の端。

ぽつんと、頭を出している岩に腰掛けている。

様に見えるが、微妙に浮いている。

「ふう。」

なれない場所で、なれない歩き。

視覚と嗅覚視覚は、目新しいものばかりで楽しませてもらっているが。

肉体的には少々大変。

額にじんわりと、汗が滲む。

でも嫌な汗ではなかった。

ふわーっと、隣まで和美が来た。

『亮輔さん？』

「ん？どうした？」

『いいえ。。。』

「そうやって、ごまかされるときになるんだが？」

『んふふ。。。』

にやにやして微妙に機嫌がいい様だった。

「和美、お前は疲れたりしないのか？」

『うん、疲れたりしないよ？それに、沢山小さな子たちが話しかけてくれるから退屈もしない。』

「小さな子たち？」

『見えない？』

そういつて、俺の目の前に両手で何かをすくうようにして持ち上げる。

もちろん、俺には何も見えない。

『そっか。私だけなんだ。』

「そこに、何かいるのか？」

ふんわりと、笑ってうなづく。

そのしぐさに、思わずドキリとしてしまった。

『・・・んふふ♪』

「何だよ・・・。」

『別に。』

・・・正直に言おう、こういう面倒な娘は苦手だ。



俺はむすつとして、前を見る。

流行歌だろうか、機嫌よさ気に鼻歌を歌っている。

頬を撫でる風。

揺れる草木の奏でる音色。

見上げればどこまでも澄んだ蒼。

テレビや、雑誌でしか見たことの無いような景色が眼前に広がっている。

目的の場所がわからないが、どうにかなるだろう。

『あっ!』

左手で口元を押さえて、右手である方向を指差している。

「どうした?」

『でっかいウサギっ!!』

「はあ?」

その指の先に目を向けると、でっかいウサギが一羽。

・・・ウサギって、緑色していたっけ?

牙、見えているっけ?

なにより、額に一角なんてあったっけ?

いやいやいや、突っ込みどころは沢山あるが、一番突っ込みたいのは。

「でかすぎるだろっ！」

ザッ。

俺の声に、反応したかこちらに顔を向ける。

口元が、赤い何かで染まっている。

犬が威嚇するときのように、牙をむき出しにしてこちらを睨んでいる。

「俺の背丈ほどあるんじゃないか?!」

みぎゃー、とか、きゃー、とかよく言い表せない声を上げている。

『うわゝゝゝ』

口元が赤い……肉食? + 赤い口元 || 食事中?

何を食べている?

でも、そんなことよりも、もっと。

もっと、突っ込むべきことが次の瞬間起きた。

『か、か、か。』

「か?」

『かわいい~~~~~っ!!』

「はあああああ???:??:?」

両手を胸の辺りで組んで、きゃ~~~~っと言いつつくねくねして  
いる。

『なにあれなにあれ?すっごく可愛くない??:ねえねえ?』

俺から見れば、獲物を横取りされまいと威嚇する獰猛な、肉食獣に  
しか見えない。

てか、逃走本能がビシビシと危険を知らせている。

きしゃーから、かーーーーーに声が変わった。

『こっちにおいで、ちっちっち。』

「いやいやいやいやいや?!!。」

・・・何この状況?

この子って、結構馬鹿な子?

いや、残念な子かな・・・。

## 9話

「ねえねえ、あの子なんていう名前かな？」

俺の隣でテンションがハイになっている半透明女子。

飛び掛っていきそうな勢いだが、和美には目もくれない。

鮮血を口元から垂らし、俺を凝視している。

俺は気づいてしまった。

目にはいつてしまった。

「あの子とお友達になれないかな？ねえねえ。」

和美は、俺の袖を引っ張りながらも視線は緑の巨大ウサギに釘付けだ。

俺も、釘付けだったが。

俺の視線は奴の口元に縫いとめられている。

なあ、食っているの獣とかだったら布とか、歯に挟まるわけ無いよな？

『ちょっと、近づいていい？』

「はあ？？？？」

俺は思わず和美を見た。

それは、致命的なミスだった。

・・・奴から視線をそらしてしまった。

ザンッ

背の高い草が宙を舞う。

鋭利な角を掲げ、その巨軀で俺の体の2倍の高さほどに飛び上がり、突進してきた。

「うわっ!。」

とっさに避ける。

赤く染まった口元、見たことの無い虹彩の瞳。  
でかい。

口角が上がり、笑っているように見えた。

『え? え?』

此処でやっと、こいつの口元の色に気づいた。

『・・・なにこれ?』

体の向きを変える。

牙をむき出しに威嚇している。

「カアッ!」

口を大きく開け吠えた。

「う……わ……」

尻餅を着いてしまった。

足に力はいらない。

ゆっくりと無様に後ずさる。

『え……ヤバイ？』

くそ、足に力はいらない。

彼我の距離は2mも満たないだろう。

近づいてくる。

口からは透明な唾液を垂らし。

ニタリと嗤う。

「う、うわああああっ!!。」

後ずさる、後ずさる、後ずさる。

草に阻まれながら、湿った地面でしりを濡らしながら。

闇雲に手を使い必死に後ずさる。

一步一步、ゆっくりとした速度で近づいてくる。

いたぶるつもりだ。

「来るな来るな来るなあああ。」

近くに和美がいるにもかかわらず無様に叫ぶ。

『え、あ? ?』

和美は見ていることしか出来ない。

目の前に口元を赤く染めて、亮輔さんににじり寄っている。

何で、亮輔さんは後ずさるのだろう?

何を怖がっているのだろう?

亮輔の左後ろに浮いている和美。

亮輔の叫び声で驚き、思考がループする。

可愛い。

ウサギは好き。

いえ、大好き。

大きければ大きいほど良い。

触りたい、抱きしめたい。

でも。

なんで、口元赤いんだろう?

亮輔さんはなんでおびえるの?

こんなに可愛いのに?

そんな亮輔さんと目が合う。

「! ! まだそんなところにいたのか! ?」

『えっ・・・あ、うん。』

地面に尻餅をついて、汗を沢山かいて必死の表情だ。  
こんな表情見たこと無い。  
どこか、おかしい。

「逃げろっ！判らないのかっ！？こいつは危険なんだよっ！」

『そんなこと無いよ？私は怖くないし、精霊さんも静かだよ？』

「はぁ？何言ってるんだよっ！！」

うさぎは、一瞬身を屈めたと思ったらまた飛び掛ってきた。

「うわあああ！」

亮輔さんが横に転がる。

さっきまで尻餅をついていた場所に、ウサギが着地する。  
ごろごろと横に転がり、間一髪で避ける。

亮輔さんは草だらけになりながらまた、後ずさる。  
その後ずさるのを、追いかけるようにウサギが追う。

そんな様子に私は首をかしげた。

なんで、逃げるの？

怖くない、本当に私は、怖くないのに。  
何でそんなに、必死になるのだろう？

「早くっ、にげるんだよおお！！」



『・・・うん。』

首をかしげながらもとりあえず、後ろを向いて離れようとした。  
あんな、必死な人の顔始めてみた。

後ろを向いた。

ふと、視界に入った。

入ってしまった。

真っ赤なそれ。

『え?』

亮輔からちょうど右へ5mくらいの場所に、赤い何かがあった。

『え・・・。。ヒト?』

それは、ヒトの残骸。

柔らかい腸と左の乳房は食いちぎられている。

右腕は無く、硬いプロテクターのような物で覆われている左腕はちぎられ離れた場所に落ちている。

食い荒らされた左乳房の下にあったはずのものは無く。  
残った右胸も半部も残っていない。  
黄色い脂肪がむき出しで、白い棒状のものは肋骨だろうか。

胸から下腹部にかけてぽっかりと穴が。

下腹部にいたっては背骨が見えるほどに丁寧<sup>ていねい</sup>に。  
首から右の頬にかけての肉が無く、歯が見えている。

嗤<sup>わら</sup>っているかのように。

その奥にあるはずの舌も無く、だらしなくあいた口は、二度としま  
ることは無い。  
喋<sup>しゃべ</sup>ることもない。

長い髪の毛と、残った右の胸がこの食べ残しが、ヒトの女性であつ  
たことを示していた。

『……うえええ。』

胃が、蠕動する。  
目の奥が熱い。

空中でうずくまり、えずく。

だが、食道を逆流する物は、無く。  
ただただ、胃が激しく引き攣<sup>ひきつ</sup>るのが判った。

『ううえええ。』

目が合ってしまった。

瞳孔が開ききり、空ろな目。

大きく見開かれた、綺麗な青い瞳。

髪の毛はブラウン。

右足はかろうじてつながっている。

左足は上下が逆になっている。

引き裂かれた鎧のような者と、剣が横に落ちていた。

生きたまま貪られたのだろうか。

その目じりには、涙の後が残っていた。

精霊が、周りで心配そうに様子を伺っている。

声が聞こえた。

『ゲホッううう』

アナタハ ダイジョウブ

貴方は（・）？

ワタシタチガ マモルカラ

ズツと鼻水をするる。

涙で視界がぼやけている。

彼女の目に映る空の色は青い。  
その頬のかけた表情は、嗤っているかのように見えた。

## 混乱の中で

目の前のウサギもどきがその口を大きく開く。  
粘度の高い唾液が口の中で糸を引いている。

げっ歯類のような前歯は無く、普通に獣の口をしていた。  
そして、歯には服らしき布の切れ端が挟まっていた。

粘つく唾液は赤く染まり、それはもちろん奴の血ではなくて捕食された哀れな誰かの物であって。

その誰かの血に俺の血が今まさに、混ざろうとしている現実から逃げるように、無様に尻餅をついて後ずさる。

「あ・・・ああ・ああ。」

やつは喜悦に彩られた表情で少しずつこちらに寄ってくる。

一步一步やつが俺に近づくたびに、俺は一步步下がる。

草の感触しかなかった手に、ニチャリと嫌な感触が手に広がった。  
思わず、てのひらを見る。

左の手のひらが、誰かの真っ赤な液体で濡れていた。

「え・・・嘘だろ？」

右手には硬い棒状のものがあって、無意識に握っていた。  
硬く握っていた。

やつは、顔だけを近づけて鼻をピスピス動かしている。

そしてやつぱり嗤う。

右手にあるのはただの棒切れだろうか。

いや、棒切れでもいい。

やつは、身を縮めてもそもそとしている。

それは、猫が獲物に飛び掛らんとしているときの感じだった。

時間はあまり無い。

短すぎないか？

今度は頭をゆらゆら。

口は閉じた。

握れるし、それなりに重い。  
武器になりえるか？

武器？

俺が戦う？

奴の動きが止まった。

右手に力を込める。

ずっしりとした重みが、嫌に安心感を与えた。

目が合った。

その棒状の者を逆手に掴む。

戦う、俺が？

生き残れるのか？

むりだろう。

ニタリと嗤う。

表情豊かな奴だ。

生きたい、生きたい。  
死にたくない。

でも何もしなければ死ぬ。

この棒状のものが、武器足りえる物だとしても奴に効くのか？  
俺で扱えるのか？

奴が、目を見開き口を開け跳躍する。

可能性は限りなくゼロに近い。  
しかし、

「やらないきゃ、確実にゼロだっ！」

右手にあらん限りの力を込めて、握った棒状の物を持ち上げる。  
半ば草に埋もれていたそれは、絡み付いていた草を引きちぎり姿を  
現す。

白銀の刀身が血で濡れ、草で汚れたそれは、一振りの剣。

「え?。」



間の抜けた声が自分からでた。

それは剣。

何かを殺し、誰かを守る剣。

何かが自分の中ではじけた。

「・・・ううううあああああつ！！」

腹筋に力を込めて、血で濡れた左手を大地に叩きつけ勢いをつける。

はらはらと、千切れた草を軌跡に残して白銀の刃が日の光に照らされて輝きを放つ。

刃は。

次の瞬間待ち受ける美味なる晚餐の気配から、笑みがこらえることの出来ない奴の横っ面にあたる。

やつは、一瞬刃に目を奪われる。

右手には重い、重い、命の重さが伝わる。

「うわああああああつ！！」

思い切り、右から左に体ごとひねり、腕を振りぬく。  
思いのほか腕に伝わる抵抗は少なかった。



## 手に残る感触と

逆手に握った剣が重い。

振りぬいたままの格好で膝をつく。

膝をつくと同時に腕から力が抜けて、剣は地面に落ちる。

視界の端に緑色をして、赤い何かを滴らせながら中を舞う何かが映っていた。

どちら。

地面に落ちた湿った音が聞こえた。

頬に熱い液体が付着する。

土と草にジワリと滲む血液。

その瞳は白く濁り、上顎から頭だけとなったウサギが俺を見つめていた。

助かったのか？

頬についた液体を手でぬぐう。

そのとき初めて気づいた、自分の手が震えていることに。

そしてぬぐった手が鮮血で染まっていたことに。

振り向けば、上顎から上をなくしたからだ、体だけが跳ねながら草々の間を進んでいった。

数回跳ねた急に力を失い、草の間に消えた。

噴水のように鮮血を撒き散らしながら。

たいした生命力だと、混乱した思考の中でぼんやりと思う。

体が震える。

心が考えることを拒否している。

思考がまとまらない。

何故ここに俺はいる。

俺は死にかけたのか。

目の前にある頭は俺が切り裂いた物なのか。

そして。

振り向いた視界の端に映る赤い塊は。

人、なのか。

わけが判らない。

視線を正面に戻す。

両手を見る。

赤く染まった手。

震える手で顔を覆い地面に両膝を付き、目は見開いたまま震える。

死をはじめて感じたことによる恐怖から？

視界の端に映る人の残骸を見てしまったからか？

・・・おそらくは両方なのだろう。

ほんの僅かな冷たい自分の思考が冷静に判断する。

何かを殺したのは始めてじゃない。

初めてではないが、手に残る感触があまりにも生々しくて。視界に映る頭と、振り向いた先に横たわる人だったそれが。

この場所が、この世界がまったく自分の知っている世界と違うということを。

死、という物が身近に潜んでいるということ。

気づかされた。

この場所が異世界で、自分の知っている世界と理がまったく違うということ。

俺はもしかすると、大きな間違いを犯したのかもしれないと。  
悲鳴を上げる心の隅で感じていた。

少し離れた場所で、横たわるウサギもどきの死体と地面に両膝を付き鳴咽を漏らす彼とと、少し先の人間の形をとどめていないそれを見た少女は。

目の前の事実から逃げるために、目を瞑り、耳をふさいだ。  
それでも。

聞こえる。

小さな声。

貴方は大丈夫。  
私が守るから。

そう、あなた  
“は”  
。

## 虚空を写す瞳。

何これ何これ何これ・・・

人が死んでる？

食べられて。

女の人が？

5人ぐらい。

全部女の人。

お腹の辺りが空っぽになって・・・

嫌。

こんなの知らない。

聞いてない。

ウサギも血を撒き散らしながら死んだし。

キモチワルイ。

こんなの、私の考えた世界じゃない。

違う違う違う。

嫌嫌嫌いやいやいやいやイヤイヤイヤイヤ・・・

~~~~~

鼓動が早い。

気持ちが悪い。

苦しい。

地面についた両手は震えながら、大地につめを立てていた。

この世界に来る直前と、着いた瞬間のワクワク感は全て消えた。
動悸が酷い。

吐きそうで吐けない。

苦しい。

でも、生きてる。

それは事実。

口の中が若干すっぱい。

でも、生きている。

大きく呼吸をする。

一回。

二回。
三回。

両膝をついて、手をだらんと下げた状態で顔を上げる。

初めてかぐような、昔にかいだことあるような、濃厚な血のにおいが鼻を突く。

草の青臭さと一緒に。

血のにおいが体について、しばらくは取れないだろう。

上を向く。

頬に熱い涙が流れた。

それでも空はどこまでも青くて、澄んでいて。
綺麗だ。

死んだ人たち、埋葬しないと。
かわいそうだ。

震える右足。
無理やりに持ち上げて地面を踏みしめる。

がくがくがく、目で見えるほど震えている。
無理やりに力を込める。

次に左足。
地面を踏みしめる。

立ち上がる。

めまいが襲い、膝に手をつく。

息が荒い。

胸が苦しい。

でも。

顔を上げる。

「生きている。俺は生きている。」

すっぱい物を飲み込む。

顔を上げて、震える足を叱咤しながら立つ。

周りは血の海。

知らない女性の遺体と、ウサギもどきの頭。

血に濡れた草。

其処から赤い血が若干糸を引きながら地面に落ちて、血の海を広げる。

足元を見ると、白銀の綺麗な剣が一振り。

血にぬれながらも輝きを失っていない。

「この人たちを埋葬しないとな。」

生きている人間の役割だと何となく思った。

それに。

「こんな綺麗な人たちが野ざらしで朽ちていくのは、なんとなくい

やだし彼女達も見られたくないだろう。」

独り言を言いながらふらふらと、遺体に近付く。

鼻を突く血の臭いと臓腑の臭い。

膝を突く、びちゃりと血で湿った土が音を立てる。

こみ上げる物を飲み込む。

そっと手を伸ばす。

綺麗な碧眼。

虚空を写す瞳。

頬に涙が流れた跡が。

土ぼこりで際立つ涙の跡。

美しいその瞳を、そっと震える手で。

そっと、閉じた。

途絶えた明日

「リア今回の依頼、それにするの？危なくない？」

中立都市ノーア幹旋所。

そこに使い込まれた鎧を纏った女性たちが3人。

「突然変異体だっけ？ちよつと無理なんじゃ・・・。」

金属製のロッド。

先端に青玉色^{サファイア}に輝く宝石を持った背の小さい少女が、俯き加減でいう。

「対応策とか・・・不明でしょう？」

美しい装飾が施された剣を腰に携えた女性というには、少々幼い女性性が壁に貼られた真新しい依頼書を見つめていた。

「うん、でも最後だから。」

「・・・・・・。」

最後、この顔触れでの最後の依頼。

この依頼を達成したらそれぞれの道に進むことが決まっていた。

双剣を携え、背に弓を背負った少女、アリエ。

60cmくらいのロッドを胸に抱えた、フィア。

そして、銀の剣を携えたリア。

「最後だから、ちゃんと誇れる依頼をこなしたい。雑魚を狩ったり、簡単な護衛とかじゃなくて。

私達が成長したって胸を張って誇れる証明がほしいんだ。」

「そっか、なら頑張ろう。」

赤銅色のショートヘアを揺らして笑う。

「怖いけど3人なら大丈夫……だよね。」

澄んだ金色の髪が輝く。

「最後の思い出を、私が私達が成長した証を立てるためにさ。」

白銀に煌く長髪をなびかせて、幹旋所を出て行く。

その容姿からこの幹旋所でもある程度有名な3人娘が行った。

依頼書

大草原で目撃された緑兎の討伐。

突然変異体であるようで、1体で活動。

大草原を横断中の商隊が襲われ、10名死亡。

本来草食であるはずの、緑兎だが肉を食らう。

体長も緑兎の3～4倍。

虚空を見上げる。

涙が流れる。

こんなはずじゃなかった。

こんなはずじゃ。

涙が流れる。

自分の傍らに佇み、自分の腸を喰らうそれは巨大で容赦が無かった。

折られ、かじられ、千切れそうな足はもう動かない。

聞こえていた親友達の悲鳴もついに途絶えた。

涙が流れた。

血で染まった空を見上げて、いやな音と、ついばまれるたびに動くからだと視界。

もう、声もでない。

ごめんなさい、ごめんなさい、ごめんなさい。

ゴキリという、何かが折れる音が響いた。

血の涙が頬を伝った。

3つの墓標

埋葬が終わった。

丁度近くに朽木があり、慰め程度だが墓標も立てた。

目を閉じて、跪き黙祷する。

本当は、こんなところでは無く、彼女たちの帰るべき場所へと返さなければいけないのだろうが、あいにく俺にはその場所は判らない。

一応、遺品だけでも身につけていた小さな鞆などを探したら身分証のような鉄色の板出てきた。

刻まれた文字はそれぞれの名前と職業、それから出身地などいわゆるドッグタグのような物のようだった。

小さな小物、宝石のようなもの、指輪やネックレス。

鉄の板を彼女たちが使っていただろう小さな鞆に入れて持つ。

3つの墓標を見る。

草原の端、刃こぼれ一つない銀の剣で草を薙ぎ払い作った墓標。

ぞんざいな扱いをしても、なお輝きを衰えさせない剣は綺麗だった。

双肩は腰に、ロッドは鞆に入れた。

これらも遺品になるだろうけど、自分が生きるために武器が必要だった。

心苦しいものがあるが、背に腹は変えられない。

生きるためだ。

和美が墓標を作る少し前から見えない。

気にはなるが、彼女には護衛の精霊がついているのだろう。

問題は無いと思う。

それに、彼女はあの化け物に見つかってはいいない。

いや、化け物には彼女の姿が見えなかったのだろう。

「和美さん、一緒に黙祷しよう。」

明るかった声は聞こえず、草原で風が織り成す漣のだけが答えた。

「和美さん？」

周囲を見渡す、居ない。

どこへ？

＜和美は気を失って、姿が見えなくなっているだけ。お前はお前の行くほうへ行けばいい。気がつけば見えるようになる、気にせず進め。＞

・・・声だけが頭に響いた。
念話という奴か？

「大丈夫なんだな？」

＜道を進め＞

「判った。」

立ち上がる。

今の声が精霊の声か？

彼女は精霊に好かれるようになったのだろうか。

それなら、俺の急に上がった身体能力も説明がつくか。

異世界チート能力。

ただ、チート級かどうかは定かではないが。

精霊の話なら信用できるか？

留まっても意味は無いか。

墓標を作っていた途中で見つけた、道らしき場所に入る。

獣道。

木々が鬱蒼と茂り森を形成していた。

その中に続く道。

「進もう。」

今は進むしかない。

最初にあったワクワク感や、使命感は既に消えていた。

ただ、鞆に入れた遺品を家族や待っている人たちに届けたいと願った。

自分が彼女達に出来ることはそれしか無いのだから。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6238s/>

透明な彼女と、非日常。

2012年1月10日23時50分発行